

読点を意識化するための指導

一、はじめに

日本語において、読点には明確な規則がなく、書き手の個性に任されているのが現状である。明確な規則がないという理由からか、教育現場において、取り立てて読点が扱われることは少なく、学習者の自然習得に任されている面が大きい。そのため、学習者の中で読点の使用は、無意識化・固定化されてしまっていると考えられる。しかし、読点は、文の要素・まとまりの伝わりやすさや、読み手が感じる印象を担う重要な符号であり、読点を指導することは、文を構成する力といった、作文能力の向上につながると考えられる。以上のような問題意識から、読点を授業の課題として扱った。その際、新たな規則を作成したり、それらを学習者へ習得させたりすることは目的としていない。そうではなく、打ち方に個性はあると

読点を意識化するための指導

松 本 匡 由

しても、一定の共通性が見られる読点について、学習者が役割を意識し、その意識を自身が読点を打つ際にも生かせることを目的としている。

一、読点指導の必要性

筆者が、読点指導の必要性を感じたきっかけは、本校高等学校第二学年の生徒に書かせた、「山月記」のテーマ批評である。

●本校第二学年の生徒が書いた「『山月記』のテーマについて」
袁 修と別れたあと吼えたとき人虎伝では「大きな巖も谷もみな揺れ動くほどだった」と書いてあるが山月記では「既に白く光を失った月を仰いで二声三声咆哮した」というように人虎伝の李徴からは強さを感じるが、山月記での李徴からは正反対の弱々しさを感じる。

この文は「というように」を挟んだ前後で、本文からの引用部分と、それをまとめた部分に分かれている。そのため、「というように」の後ろには読点を打つことが望ましいが、そこに読点はない。

また、前半の引用部分は「人虎伝」と「山月記」を対比する記述となっているため、「書いてあるが」の後ろには読点を打つことが望ましいが、打たれていない。

このような、必要と思われる箇所に読点を打つことができない事例が散見され、読点の使用に対する意識が希薄なのではないかと思われる。

読点は、石黒が指摘しているように、打たれる位置によって意味や読み取りやすさを変化させる。森岡の言葉を借りれば、読点を打ち、句点を付けるということは、単なる末梢的な技術でなく、ことばや意味のかたまりを符号によって視覚的に区切る知的な作業で、それは思考力の裏付けを必要とする。言いかえれば、読点には、正しく分かりやすい文を作成するための符号という役割を認めることができ、読点指導は、学習者の作文能力の向上に資するといえる。

しかし、棚橋が述べているように、学校教育の場においてはあまり意識されていないのが実情であり、取り立てて指導されることは少なく、学習者の自然習得に任されている面が大きいのではないだろうか。

学習指導要領では、読点はどのように扱われているのか。平成三〇年告示の高等学校学習指導要領解説では、「論理国語」において以下のように述べられている。

論文・レポートのような論証のための文章や、法令・契約書のような客観的な内容を一義的に示すための文章においては、書き手の意図を明確に伝え、読み手の解釈に揺れが生じる可能性を極力避けるために、文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方に関夫が必要となる。

このような文章を構成する文については、例えば、語句の選択や成分の順序、必要に応じた定義や、「全国学力・学習状況調査（以下「調査」という）」といった略記の仕方、「ここでは、〓県は：地方に含めないものとする」のような多義的な解釈を許さない述べ方、読点や記号の使い方などに注意して、一つの文の意味が必ず一つに定まるような文の組立て方や接続の仕方について理解を深めることが求められる。（論理国語、3内容、「知識及び技能」）

読点は、論理的・一義的な文章を作成するための符号として、指導の必要性が述べられている。

ただし、今回の実践においては、読点の、論理的文章を作成する

ための符号という側面だけでなく、その役割全般を指導の対象とした。

また、大学附属校である本校としても、文の作成指導を行うことは、レポートや論文作成が必要となる大学での学びに向けて必要であり、その上で読点を指導し、意識させることは有効であると考えられる。

三、読点分類の先行例

読点について、今日参考になるのは、昭和二年に文部省教科書局調査課国語調査室が発表した『くぎり符号のつかひ方（句読法案）』である。これは明治三十九年に文部大臣官房図書課が発表した『句読法案』を元に作られたもので、国から一般的な規則として示されているものとしては最新の文書である。つまり、日本の句読点については、昭和二年以来、全体としての整備はされていないのが現状といえる。さらに『くぎり符号のつかひ方（句読法案）』の中には、「くぎり符号の適用は一種の修辞でもあるから、文の論理的なすじみちを乱さない範囲内で自由に加減し、あるひはこの案を参考として更に他の符号を使つてもよい。」という記述があることから、厳守すべき明確な規則ではないことがわかる。

そのように、明確な規則がない中で、読点の規則や役割に対する

分類はどのように行われてきたのか。読点分類の先行例を列挙し、授業に援用することを前提に吟味した。尚、紙面の関係上、先行例について詳しく紹介することはできないため、詳細は各々で参照していただければ幸いである。

さらに言い添えておくと、読点分類は、明確な規則がないという点からか、体系化された分類が多くはない。以下、引用する先行例は、体系化されており、かつ、引用件数の多いものを中心に挙げている。また、読点分類の先行例に対する筆者の評価は、研究的な視点よりも教室で学習者に教える視点からのものであるということをご留意いただきたい。

読点分類の先行例

- ① 文部省教科書局調査課国語調査室（1946）『くぎり符号のつかひ方（句読法案）』
- ② 永野賢（1958）『学校文法概説』朝倉書店
- ③ 武部良明（1982）『句読点』『日本語教育事典』大修館書店
- ④ 岡崎洋三（1988）『日本語とテンの打ち方』晩聲社
- ⑤ 本多勝一（1994）『新版 実戦・日本語の作文技術』朝日文庫

- ⑥佐藤政光（2000）「日本語の読点について―規則の再検討―」『明治大学教養論集』331
- ⑦石黒圭（2011）「句読点のルール」『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店

①～③は、細分化された規則が示され、打つことが可能な「場合分け」が示されることが主となっており、「なぜ、そこに読点を打つことができるのか」という読点の「役割」に関する説明が体系化されていない。そのため、「場合分け」の中には存在しない例外への対応や、文脈や文章の種類を考えて、読点を打つ・打たないといった対応に関する問題が指導上は考えられる。

④は、読点の機能が「分かち」ことにあるとし、読点の役割を五つにまとめた点は参考になるが、⑦石黒の先行例に挙げられている、「構造」に関する記述がなく、文全体の意味を考慮した読点の打ち方の説明が難しいと考えられる。

⑤は「述部（動詞・形容詞・形容動詞）が最後にくる。」「形容する語句が先にくる（修飾辞が被修飾辞の前にくる。）」「長い修飾語ほど先に。」「句を先に。」という日本語順の基本原則を四つ掲げ、その上で、「長い修飾語が二つ以上あるときその境界にテンをうつ。」「語順が逆になったときにテンをうつ。」というテンの二大原則を示し、これらの原則以外の自由なテンを「思想のテン」として

いる。この先行例は、語順に対する考え方などは参考になるが、本文に用いられている語句の定義が不明確であり、重文などへの対応も難しいという問題点が存在する。また、語順に対して、「基本原則」としてしまふことにも教室で教える上での難しさが感じられる。

⑥は、読点の役割を三つ、そこから細分化したものを合わせても五つにまでまとめている。しかし、「ここでは特に、論述文を書き表す際の読点の問題に焦点を当てることにする」と本文に記述されていることからわかるように、論理的文章を書く際に重要な読点の役割のみが述べられており、読点の役割全体を対象としていない。

⑦は読点の分類について、「意味」「長さ」「構造」「表記」「音調」「リズム」「強調」の七分類にまとめている。タイトルこそ「ルール」という読者の注意を引きやすい言葉が使われているが、ルール・規則というよりも、読点の役割を体系化した先行例だといえる。管見の限り、授業で用いることに最も適した役割分類だと判断した。それまでの先行例と違い、「構造」に関して述べられている点や、役割が七つにまとまっているため学習者の負担が少ない点、その理由として挙げられる。

以上より、本授業では、石黒の役割分類を主な参考例として用い、以下のような役割分類を用いて授業を行うこととした。

本授業での読点役割分類

①意味・複数取れる文の意味を明確にしたり、取りづらい文の意味を明確にしたりするための読点。

②構造・文意の中心に対する理解を容易にするための読点。

③表記・同じ表記が続く読みにくさを解消させるために打つ読点。

④音調・ことばを音にした時に置かれる間を示す際に打つ読点。

⑤リズム・文体のリズムを考えて打たれる読点。

⑥強調・文の一部の要素を際立たせるために打たれる読点。

石黒の「意味」と「長さ」を、「意味」という一つの項目に統合した。これらは、「読み取れない」もしくは「読み取りづらい」文の意味を明確にするための読点であり、これらに共通する「係り受け関係を明確にすることで文意を明確にする」という役割を指導上は強調すべきだと判断したためである。

それでは実際に行った授業について述べていきたい。

四、授業実践

a、授業概要

○対象 高校第三学年I組31名

○教科 現代文B（2単位）

○単元名 「読点を意識して打とう」（自作プリント）

○単元の主な目標 読点についての活動を通じて、読点の役割を理解し、意識的に読点を打つことができる。（3 内容（1）オ）

○指導観 読点については規則がなく、取り立てて指導されてこなかったために、学習者の中で読点の使用は無意識化・固定化されてしまっていると考えられる。そのような読点を、授業の課題として扱うことで、意識化・対象化させたい。

○指導計画

●一時限目

(i) 課題1・2に学習者が個人で取り組む。

(ii) 読点箇所と基準について、他の学習者と共有する。

(iii) 読点の役割について、プリントを用いて授業者が説明する。

(iv) 原文から読点を消去した文章に読点を打つ作業を、グループで行う。

●二時限目

- (i) 読点の役割について復習する。
- (ii) 前時のグループ活動結果を教室で共有し、各読点を打った理由について発表する。
- (iii) 課題4・5・6に学習者が個人で取り組む。

既に説明したように、読点指導の必要性を考えると必要なのは、第二学年の文章を添削したことなのだが、授業数や単元の関係もあり、上記クラスにおいて行うこととなった。

以下、授業の展開について使用プリントと同じ内容を示しつつ説明していく。

b、一時限目 (i)～(ii)

課題1 次の文章は原文から読点を除いたものである。必要だと思われるところすべてに読点を打ちなさい。

ミロのヴィーナスを眺めながら彼女がこんなにも魅惑的であるためには両腕を失っていなければならなかったのだとほくはふとふしぎな思いにとらわれたことがある。つまりそこには美術作品の運命という制作者のあずかり知らぬ何ものかも微妙な協力をし

ているように思われてならなかったのである。

パロス産の大理石でできている彼女は十九世紀のはじめごろメロス島でその農民により思いがけなく発掘されフランス人に買いつけられてパリのルーヴル美術館に運ばれたと言われている。そのとき彼女はその両腕を故郷であるギリシャの海か陸のどこかいわば生ぐさい秘密の場所にうまく忘れてきたのであった。

課題2 あなたは、読点をどのような基準によって打ちましたか。説明しなさい。

まず、原文から読点を消去した文章に、読点を打たせる活動(課題1)を学習者個人で取り組ませた。今回は、清岡卓行「手の変幻」(数研出版「現代文B」より引用)を使用した。今後学習者は「小説」や「詩」の作成機会よりも「レポート」や「論文」の作成機会の方が多くであろうことから「評論文」を選んだ。また、「読点」という明確な正解がないものを扱う上で、自分とは違う意見に触れることが必要だと感じたため、学習者間で読点箇所が揺れが生じやすいと思われる文章を選んだ。

そして、課題1における読点をどのような基準で打ったか記入させた(課題2)。

次に、教室の雰囲気作りも兼ねて、課題1・2について、周りの学習者と共有させた。

課題2の、学習者の回答例を紹介すると、「一呼吸入れるところ」や「接続詞の後」といった、おそらく既習の内容だと思われる回答や、「文が長くなったとき」「読みやすくなるように」「なんとなく打ちたいところ」といった、感覚的な回答が目立った。他にも、「英語でいうと、「that」で説明が入るようなところの前に打った」「副詞節の下」「主述の間に長い説明が入るとき」などの鋭い回答も複数存在したが、いずれにせよ、学習者の中で、基準は体系化されていないように感じられた。

他の学習者との共有の後に、読点の役割について、以下のようなプリントを用いて説明した。

c、一時限目(…iii)～(iv)

●読点の役割

読点には以下のような役割がある。

| | | |
|--------|---------|--------|
| 〔 意味 〕 | 〔 構造 〕 | 〔 標記 〕 |
| 〔 音調 〕 | 〔 リズム 〕 | 〔 強調 〕 |

読点を意識化するための指導

① 意味 (複数取れる文の意味を明確にしたり、取りづらい文の意味を明確にしたりするための読点。)

例文1) その刑事は血だらけになって逃げだした犯人を追いかけた。
例文2) お父さんは小学校でケンカをして傷だらけになった太郎を手当てした。

② 構造 (文意の中心の理解を容易にするために打つ読点。)

例文) 先月は人がいっぱい店でなかなか入れなかったが今日は前もって予約を入れておいたのですぐに店に入ることができました。

③ 表記 (同じ表記が続く読みにくさを解消させるために打つ読点。)

例文) 実在するのは物理学が描き出す世界であり、そこからの物理的な刺激的作用が存在する。

④ 音調 (ことばを音にした時に置かれる間を示す際に打つ読点。)

例文) こっちはひどい息切れがする。何を言うにも、とぎれときれだ。見やがれ、そんなだから、お前は、大学にも、行かないんだ、行けるもんか。(阿部昭『三月の風』)

⑤ リズム (文体のリズムを考えて打たれる読点。)

例文1) まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何とも知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられて来る。どだい、それは、笑顔でない。この子は、少しも笑ってはいないのだ。(太宰治『人間失格』)

例文2) 人は記憶を失わぬ限り故人を夢に見ることが出来るが生きている相手を夢でのみ見ていた佐助のような場合にはいつ死別れたともはつきりした時は指させないかも知れない。(谷崎潤一郎『春琴抄』)

⑥ 強調 (文の一部の要素を際立たせるために打たれる読点。)

例文) 乗るだけという幸福。

役割の①～⑥についてそれぞれ説明していきたい。

①「意味」の読点。例文1であるが、「血だらけになっ」たのが

「犯人」であれば「刑事は」の直後に読点を打つし、「血だらけになっ」たのが「刑事」であれば「血だらけになつて」の直後に読点を打つであろう。また、二つ目の例文であれば、「お父さん」が小学校でケンカをする可能性は低く、「太郎」は「傷だらけになつた」とあるため、ケンカをしたのはおそらく「太郎」だと考えられる。そのため、「お父さんは」の直後に読点を打つと読みやすくなる。このように「意味」の読点とは、「複数取れる文の意味を明確にしたり、取りづらいつの文の意味を明確にしつるための読点。」を指す。

②「構造」の読点。例文に一点だけ読点を打つならどこに打つだろうか。例文は「先月」と「今日」の、対比の文になっているため、おそらくほとんどの人が「入れなかつたが」の直後に打つと考えられる。さらに二点追加で打つとすれば、この文は「先月」について述べられた部分と「今日」について述べられた部分が、それぞれ「理由―結果」という並びになっているので、「いっばいで」と「入れておいたので」の直後に打つと、その構造が明確になる。また、「先月」「今月」という時期の対比構造を強調するために、「先月は」と「今日は」の直後に打つことも考えられる。このように、「構造」の読点とは「文意の中心の理解を容易にするために打つ読点。」を指す。

③ 「表記」の読点。表記の読点は、例文の読点のような、ひらがな続きや漢字続きなど、同じ表記が連続する時に語句の境目を明確にする読点である。つまり、「同じ表記が続く読みにくさを解消させるために打つ読点。」を指す。

④ 「音調」の読点。例文の読点は、ひどい息切れによって、ときどきとぎれに発話される様子を表している。このように、「音調」の読点とは「ことは音を音にした時に置かれる間を示す際に打つ読点。」を指す。

⑤ 「リズム」の読点。例文1は、太宰治の『人間失格』で、かなり頻繁に、読点が打たれている。この他にも太宰の作品は読点の割合が高いものが多く、読点の多い文体を太宰は好んで用いた。例文2は、谷崎の『春琴抄』であるが、「人間失格」とは対照的に読点がほとんど使われていない。これは谷崎が「1、センテンスの切れ目をほかす目的」「2、文章の息を長くする目的」「3、薄墨ですらすらと書き流したような、淡い、弱々しい心持ちを出す目的」によって、このような文体を選択したことは『文章読本』でも語られている通りである。このように、「リズム」の読点とは「文体のリズムを考えて打たれる読点。」を指す。「音調」の読点と似ているが、「音調」の読点が、どのように再生されるかという音の要素を重んじる読点であるのに対し、「リズム」の読点は、読者が感じる印象

に重きを置いてある所に違いがある。そのため、「文体の印象を考えて打たれる読点」とも言いかえられるであろう。

⑥ 「強調」の読点。例文は「電車は車と違って乗るだけで目的地へ辿りつくので、幸せな時間を過ごすことができる」という内容の電車広告からの引用である。「乗るだけがいい」という部分を強調するのであれば、「乗るだけ」の直後に読点を打つであろうし、「幸福な時間だ」という部分を強調するのであれば、「という」の直後に打つであろう。「強調」の読点とは、このような「文の一部の要素を、際立たせるために打たれる読点。」を指す。

以上の「意味」「構造」「標記」「音調」「リズム」「強調」が、本実践で使用した読点役割である。

これらの読点役割を説明する際、「読点には明確な規則はないため、特定の場所に必ず打たなければならないものではなく、役割を意識して打つことが大切だ。」と理解させた。

また、「1読点につき必ずしも役割が一つではない。」ということをも、例文を用いて理解させた。例えば、①の例文1において、もし後ろに「お母さんは、その後で太郎を抱きしめた。」のような文が続いていれば「お父さんは手当てした。」「お母さんは抱きしめた。」という文脈となり、この読点は「強調」の役割を持った読点とも判断することができる。

さらに、「読点役割の比重は、文の種類によって変わる。」ということを理解させた。例えば、一義的な文章・論理的な文章であれば、「意味」や「構造」、「表記」の読点が優先されるだろうし、人を惹きつけたいエッセイや小説をかくのであれば、「音調」や「リズム」に気を使わないといけない。先程、学習者たちが読点を打った文章は、「評論文」だということも、ここで意識させた。

読点の役割について説明した後は、個人で行ったものと同じ原文を用いて、グループで同じ活動（課題1・2）を行った。今回は五〜六人組のグループを六グループ作って行った。

d、二時限目 (i) (ii)

二時限目では、最初に読点の役割について復習した後、一限目のグループ活動の結果を教室で共有し、読点を打った理由についてグループごとに発表させた。その際、スクリーンでグループ活動の結果を共有した。スクリーンには、全六グループ中何グループがどこに読点を打ったかがわかるようにした。授業者は、どのグループがどこに読点を打ったかがわかるようにしておき、読点箇所ごとに任意でグループを指名して発表させた。その上で、それぞれの発表について補足や説明を行った。本稿では紙面の関係上、印象に残った指導例を二つだけ、紹介する。

●グループ活動の結果（括弧内の数字は、全六グループ中何グループが当該箇所に読点を打ったかを示している。）

ミロのヴィーナスを眺めながら（5^ア）彼女がこんなにも魅惑的であるためには（1）両腕を失っていなければならなかったのだ（1）と（5）ほくは（1）ふとふしぎな思いにとらわれたことがある。つまり（5）そこには美術作品の運命という（2）作者のあずかり知らぬ何ものかも（3）微妙な協力をしているように思われてならなかったのである。

パロス産の大理石で（1）できている彼女は（5^イ）十九世紀のはじめごろ（3）メロス島で（2）その農民により思いがけなく発掘され（6^ウ）フランス人に買い取られて（5^エ）パリのルーヴル美術館に運ばれたと言われている。そのとき（1）彼女は（4）その両腕を（2）故郷であるギリシャの海か陸のどこか（6）いわば生ぐさい秘密の場所にうまく忘れてきたのであった。

まず、5つのグループが打った、アの読点であるが、ここに読点が無いと「ミロのヴィーナスを眺めながら」が、直後の「彼女が」にかかってしまい、まるで「ミロのヴィーナス」を、それとは別の「彼女」が眺めていると誤読しそうになる。そうではなく、「ミロのヴィーナスを眺めながら」が、比較的遠い位置にある「ふとふしぎ

な思いにとらわれたことがある」という述部へとかかることを明らかにするための読点だということが出来る。この読点については一人の男子生徒が説明してくれたため、補足として以上のような説明を行った。

また、イ・ウ・エの読点についても説明した。この文を分解すると、「パロス産のく彼女は」という主部が、①「発掘され」②「買い取られて」③「運ばれた」④「と言われている」という四つの述部へとかかる文だと理解できるが、そのうち述部①③は、ヴィーナス像が、現在の環境に至るまでの過程を表している。そして、この文意の中心も、その過程を表すことにあると言える。その、文構造を明らかにするには、イ・ウ・エの位置に読点を打つと読み取りが易しくなると考えられる。これらの読点に関しては「並列」というワードを生徒が出してくれたため、補足する形で、以上のような説明を付け加えた。

e、二時限目 (…iii)

課題4 次の文章は原文から読点を除いたものである。必要だと
思われるところすべてに読点を打ちなさい。

二十一世紀は「知識社会」だという声がある。二十世紀までは

読点を意識化するための指導

土地労働資本などが富を生む源泉だったのだが今後は知識が鍵を握るといふ。なるほど例えば投資金融で利益を得ようとすれば各企業の製品開発力を正しく把握し成長の可能性についての確な判断ができなくてはならない。そのため評価表のようなものが「知識」と見なされているのである。具体的に言うとならぬ各項目をなす断片的データのようなのが「情報」でありこの情報(データ)群を体系的にまとめあげたのがいわゆる「知識」だと常識的に定義されているのである。

課題5 右に記入した読点のうち、指定された三か所について、
読点を打った理由を説明しなさい。

〔二点目〕

〔三点目〕

〔最後〕

課題6 本授業での学びを記入してください。

最後に、再び個人活動を行った。「意識的に読点を打つ」という目標が学習者個人で達成できているかを測るため、二度目の個人活

五三

動には「手の変幻」ではなく、西垣通の「知識社会という幻想」(教研出版「現代文B」より引用)を用いた。理由としては、「手の変幻」を選んだ理由と同じく、「評論文」であり、学習者の間で揺れが生まれそうな文章だと判断したからである。

そして、個人活動で打った読点のうち、授業者が指定した三つの読点について、打った理由を記入させた。今回は、学習者がそれぞれ打った読点のうち、「二点目」「三点目」「最後」を指定した。

f、学習者の成果物(課題2・4・5)

以下に何点か、学習者の成果物を紹介する。その際、課題4・課題5、と共に、課題2も併記するようにした。まったく同じ課題ではないため、明確な比較にはならないが、本授業を通じた、学習者の学習状況の一端がお分かりいただけたと思う。

●学習者A

課題2

- ・主語の後にうちました。
- ・接続詞
- ・長い文章のあいだ

課題4

二十一世紀は「知識社会」だという声がある。二十世紀まで

は、土地労働資本などが富を生む源泉だったのだが、「今後は、知識が鍵を握るといふ。なるほど、例えば投資金融で利益を得ようとするれば、各企業の製品開発力を正しく把握し、成長の可能性について、的確な判断ができなくてはならない。そのため評価表のようなものが「知識」と見なされているのである。

具体的に言うと、評価表の各項目をなす、断片的データのようなものが「情報」であり、この情報(データ)群を体系的にまとめあげたのが、いわゆる「知識」だと、常識的に定義されているのである。

課題5

二点目…読点の前と後ろで話している時期がちがうから

三点目…「二十世紀までは」に読点をうけたので「今後は」に

もつけました。

最後…知識というものを強調するため。「情報」と「知識」の比較。

まず、学習者Aであるが、二点目は、読点より前が「二十世紀以前」、後ろが「今後」という比較の文になっているため、その境目に打ったことだろう。三点目は、「二十世紀までは」の後ろに読点を打ったため、比較の対象である「今後は」の後ろにも打つ

たという理由付けである。最後は、「知識」という言葉の強調のため、そして、「知識」は「情報」と比較されているため、対応する箇所に読点を打つことで、比較構造を見えやすくするため、とある。いずれも、読点の「構造」の役割を、よく意識できている。

●学習者B

課題2

・音読した時に読みにくいところがないように

課題4

二十世紀は「知識社会」だという声がある。二十世紀までは、土地労働資本などが富を生む源泉だったが、今後は、知識が鍵を握るといふ。なるほど、例えば投資金融で利益を得ようとするれば、各企業の製品開発力を正しく把握し成長の可能性についての確な判断ができなくてはならない。そのための評価表のようなものが「知識」と見なされているのである。具体的に言うと、評価表の各項目をなす断片的データのようなのが「情報」であり、この情報（データ）群を体系的にまとめあげたのがいわゆる「知識」だと、常識的に定義されているのである。

課題5

二点目…前と後ろの文の内容を比べるため。

三点目…「時間」をわかりやすくするため。

最後の点…常識的に定義されているものが何かを強調するため。

学習者Bは、最後の読点の理由付けを、「常識的に」という言葉の強調としている。つまり「情報」「知識」に対する上記の解釈が、「常識」「一般論」だと強調することを意識しているといえる。

ここに紹介できなかった学習者も、おおむね、自分の打った読点について意識することができていた。

続いて、課題6の成果物も紹介し、それらの内容も踏まえて「まとめ」に入りたい。

g、学習者の成果物（課題6）

●学習者C

個人的に興味深い授業でした。小学校の時に習ってないのに、作文の添削で大量に読点を書きこまれて困惑した記憶もあり、ずっと疑問に思っていました。やってみると、よくよく考えれば、納得できるところもありました。特に、意味の役割に関心を持ちました。将来論文を書くときにも必要になると思うので、

普段から意識してみようと思います。

●学習者D

文章をかくときに、読点をどこに打つべきかいつも悩んでいたのも、すごく助かりました。

読点を意識するだけで文章の構造が分かってくるので今までよりも理解が深くなりました。

●学習者E

今回の授業で、今までは読点の個数がとても少なかったということがわかりました。これからは読点を意識して打つていこうと思います。

五、まとめ

本授業を受ける前の学習者は「一呼吸入れるところ」や「接続詞の後」「読みやすくなるように」「なんとなく打ちたいところ」といった体系化されていない既習の内容や自分自身の感覚で読点を打っていたが、今回の授業を通じて「読点の役割を理解し、意識的に読点を打つことができる」という目標は、おおむね達成することができた。

学習者自身も、読点について取り立てて授業を受けたことがないため、読点を打つ箇所に対しては悩みを抱えていたようで、今回の

授業を自分の読点意識に対する見直しや将来の言語活動につなげようとする姿勢が見られた。また、読点に対する意識が、読解に生きてくるという意見も多数見られた。読点指導は読解力の向上にもつながると考えられる。

読点箇所の妥当性について、説明し理解させるには、文の構造について説明することは必要不可欠であり、その結果、文の構造について意識することができた学習者が一定数存在した。読点の指導は文の構造を指導するにも、有効であることがわかった。

今回は、学習者の必要性和時間数の関係から、評論文を用いた活動のみを行ったが、今後は小説や随想なども用いた活動も行いたいと考えている。また、読点のみを打つことはできても、課題6のように自分で作文する際には読点を打つことができていない学習者が数名みられた。今回のような活動の後は、読点を意識して、学習者が一から作文を行う活動が必要であると考えられる。そちらに関しては、今後の課題としたい。

注

- ① 石黒圭(2011)「句読点のルール」『日本語文章・文体・表現事典』
- ② 森岡健二(1988)「ことばの教育」『現代語研究シリーズ第4巻』
- ③ 棚橋尚子(2015)「句読点」『国語科重要用語辞典』明治図書